



昭和52年(1977年)

3月号(No. 381)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 150円

目次

ネパールの旅から

- 山の人 町の人(近藤信行)……(1)
歴史の街道(図書委員会)……(2)

スキー2題

- 蓼科山に雪艇で初めて登りしこと
(田中武弘)……(3)

- 大雪山旭岳グレンデ(井手貢夫)……(5)

明治初期の日本における

- 外国人の登山活動について(6)
(水野 勉)……(4)

図書紹介……(6)

東海山岳第4号

1975 TUATAC DAULAGIRI・II

本草関係図書目録

御在所岳北谷の水質調査(2)

- (尾上 昇)……(8)
「この一本展」から……(10)

1枚の写真(望月達夫)

- K₂——そして私の知っている人
(吉沢一郎)

お知らせと報告……(7)~(10)

ルーム日誌・会員動向など……(10), (11)

カット/谷アユ子

●ネパールの旅から

そのI

山の人 町の人

近藤 信行

暮れから正月にかけて、一三人の山仲間とともにネパールに出かけた(別項参照)。メンバーの半数にとつて、はじめてのネパール旅行であった。私とても、ながいあいだ、ヒマラヤの高峰につよいあこがれをいだきながら、これまでその機会にめぐまれなかった。約三週間という時間のなかで、今はやりのトレッキングに出たわけだが、はじめての体験であっただけに、私は壮大な自然景観と、そこに住む人たちの素朴な、あたたかい人情にふれて、しばしば感動をおぼえた。

アンナプルナ山群とダウラギリ山群のあいだのカリ・ガンダキの

谷は、上流へゆくにしたがって、ひろい河原となつて、はてしなくつづいている。乳白色の水のながれは、幾条にもわかれて、とうとうとおしながされている。軍隊の駐屯地と飛行場のあるジョムソムからさきは、高原と砂漠のチベット人の世界だった。

カグベニという寒村に幕営した私たちは、翌日、ムクチナート(三八〇〇メートル)まで登ることにした。約一〇〇〇メートルの登りだ。ヒンズー教の聖地として知られるそこは、河口慧海の「西藏旅行記」以来、多くの探検家によって叙述されてきたところだが、神聖な火と水がいったいどんなものか、みておきたかったのである。

谷をはなれて、高原状の茶褐色の斜面をつたうと、ぐんぐんと高度をまして、アンナプルナの北部につながらるティリツォ・ヒマールやニルギリのピークがみえてくる。そして西南のかたには、凄絶な水壁をしたがえたダウラギリの主峰が大きな姿をあらわしてくる。それは人間をよせつけぬかのような大自然のすばらしい造形物であった。

キンガール、プラン、ジャルコットなどの村をすぎて、前面にヤカワ・ピーク、ムクチナート・ピークをみながら、ながいトレールをたどると、樹木の生いしげる斜面には、石垣にかこまれたナラヤンの寺があった。百八の吐水は上部の泉からわきでていて、清冽な風情をたたえている。老婆に案内されて、ひとつの堂内には、仏像が安置された岩棚の下には垂れ幕がかけられていて、彼女がそれを

れをもたげると、奥には青い焰がゆるやかに燃えている。数カ所どころな自然現象がみられたが、それは天然ガスの噴出にちがいない。ドーラ・メーバル(石に火が燃える)、サーラ・メーバル(土に火が燃える)という霊跡だった。ムクチナートは聖地として多くの巡礼をあつめているのだが、明治三十二年にここを訪問した河口慧海は「実に馬鹿げた話で、愚民が之を見ると全く水の中から火が燃えて出るやうに見えるのである。まず」とその紀行に述べている。平坦地の一角には、旅券を点検する警察官がいるが、彼らはトランプ博打に余念がなかった。

カトマンズにて

首都カトマンズでは、ひとりのこつてこの不思議な仏教都市をみであることにした。

AP通信員ビナヤ氏は、ロイヤル・アカデミーの詩人ジョシ氏を紹介してくれ、ネパールの文学・芸術についての助言をうることができた。各国の旅行者や登山家たちが、それぞれの体験をもとに、すぐれた山の文学を生んできたがネパール人による山の文学にどんなものがあるか、というのが、私の興味の焦点だった。詩人や作家たちは、ラナ政権以後の政変の時代にあつて、表現になやんでいる

山をきれいに「ゴミは持ち帰ろう」

様子だった。ジョシ氏は、私の設問にたいして、困惑の表情をうかべながら、山の文学はまだ書かれていないと答えた。ほっそりした若い母親のブレム・ラータさんにネワール語の通訳をたのんで、七十歳の詩人チタダール氏をたずねると、彼は投獄された旧時代の体験をながと話していた。

三田幸夫さんから紹介されたローク・ダルシャン氏を訪ねると、彼はもともとも古い日本の友人の紹介だと言って、二日間、私を連れあるいてくれた。彼はまだ四十五歳の若さだが、かつて宮内庁長官をつとめた人で、故佐藤達夫氏によって「ネパールの伊藤博文」にたとえられたこともある。いまはルンビニ（釈迦の生誕地）に大寺院を建立するプロジェクトの議長をつとめている。

一月十日は、ネパール建国のときのナラヤナ王の誕生日とあって、祝日とのことだった。ダルシャン氏から宿に電話があつて、さっそく彼の家に出かけると、これからラマの仏の化身（インカーネーション）がくるので飛行場へむかえに行くことだった。一緒に行かないか、めったに会うことのできない人だと彼は言った。居あわせたブレム・ラータもぜひ行きたいと言う。

空港の待合室には赤い毛氈がひかれ、歓迎の準備がなされていた。年老いた高僧たちもかしこまっ

仏の到来を待っていた。

飛行機から降りたのは、まだ二十歳にもならぬ、少年のような僧侶だった。出むかえのものが手をあわせて拝謁すると、彼はほえみをうかべて会釈する。日本人が目玉寺とよんでいるスワヤンブナートの寺院につくと、数多くの僧侶が色とりどりの旗を立て、奏楽とともにむかえた。

丘の上のうすぐらい本堂では、仏の化身を玉座にすえて、ラマ僧たちの儀式がはじめられた。読経



のあと、僧侶たちはひとりひとり玉座のまえにすすみで、白布や農産物などの供物と食事をささげる。すると化身はこやかにわらって、それを受けとるのであった。彼が食器にもられた乾米を手でつまんで口に入れると、僧侶たちもそれにしたがった。私もダルシャン氏のとなりに腰をおろして手づかみでそれを食べた。神秘そのものの光景であった。

(サンケイ新聞昭和五十二年二月二日付夕刊より転載)

●ネパールの旅から——そのII

歴 史 の 街 道

図 書 委 員 会

昨年末から約二週間、ネパールの旅をおこなった。参加者は図書委員会有志を中心とした十四名である。計画の発端は、図書委員長

の飛行。空港でサードのアンキタルたちの迎えをうける。空港とはいっても名ばかり、河岸の平坦部を整地しただけ。プロペラが回ると砂煙で機体が見えなくなる。周辺は人家もまばらで、カリ・ガンダキの両岸に切りたつ山にも樹木らしいものはなく、茶褐色の山肌が荒々しい。カトマンズからいきなりこの峡谷に降りたって、景観と環境の落差はげしさに一瞬とまどい、胸をつかれる。東面に氷雪のニルギリが高く、風は身を切るようだ。標高約二八〇〇メートル。昼食後、ムクチナートへ向けて出発。その日はカリ・ガンダキとヨング・コーラの出合の部落カグベニのはずれで幕営。

この辺はもう禁断の地ムスタン王国の入口で、チベットの色濃い風土。

29日。聖地ムクチナートへ。標高差一〇〇〇メートル、距離往復二〇余キロ。午前中で往復できると甘く考えたのがつまづきのもとで、カグベニへ全員が戻り終えたのは午後四時すぎ。この狂いが数日尾をひくことになる。予定を消化するためジョムソムまで下る。

27日。カトマンズ入り。トレッキング・パーミットの取得と準備。28日。カトマンズ空港よりRNAのツイン・オッター機でジョムソムへ。マナスル三山やアンナプルナ連峰を右に、ダウラギリの壁を左になめるようにして一時間弱

30日。日程の遅れを挽回するため一気にカラパニまで南下。最初の部落マルファは狭い石畳の道の両側にメルヘン的な純白の石造り

の家並がつづく。道傍の水道は日本の遠征隊の援助によるものという。国の園芸農場のあたりから針葉樹など緑の木が目につくようになる。街道一の部落ツクチェは烈風と霰の中で人影もまばら。慧海が滞在中、エルゾグのGHQにもなり、チベットとの交易路の中心としてタカリ族によって繁栄した往時の面影は、軒をつらねる石積みの方にのびるのみ。

午後、幅二キロはあろうという広い河原に強烈に吹き荒れる砂嵐の中を行く。道は右岸を高捲くのと河原の砂嵐の真只中をゆく左岸のと二つあり、私たちは二手にわかれる。河原の水たまりにオタマジャクシ。やがて峡谷の底はとっぴりと暮れ灯が欲しいほどのなかに頭上高くアンナプルナ南峰の稜線が薄紫の空にバラ色に光って息をのむほどに美しい。カラパニ着19時。

細々とつづく。眼下数百メートルにカリ・ガンダキは奔流となつて落下している。タトパニ(温かい水の意)着19時。今日で三日連続灯をつけて歩く。トレッキングといふのはこんなに長時間、しかも夜も歩くものとは知らなんだ、ラニンダだと冗談が出るが、ここで当初の日程に追いついて一同安緒。大晦日、皎々とした月明りの下でほの白く光るニルギリを仰ぎながら年越ソバ。豪華な宴。

1月1日。ネパール山中で迎える元旦。ロキシーをおとそ代りに雑煮で新年を祝う。部落のはずれに「ヒマラヤの花嫁」を著した平尾さん夫妻の経営するスルジェ館がある。立寄って夫妻に挨拶。

この日は約一〇〇〇メートルの登りの半日行程でシールカ泊まり。テント場は部落なほど、寺院裏手の台地。すばらしい展望台で、辿ってきたカリ・ガンダキの谷筋の上にダウラギリが圧倒的な量感でそびえている。南面の数千メートルに及ぶ壁を正面に堂々と両肩を張ったその姿は、河村ドクターをして、すごい、もうこれで帰りの飛行機が落ちても悔いはない、と嘆息させたほど。

シールカには川喜田二郎氏らのグループが援助開発した荷物運搬のロープウェイがあり、部落の人たちは大変好意的。川喜田氏の友人というチャンダラバニ氏が現われいろいろ面倒をみてくれる。夕食

まで時間はたっぷりあり、地元の人々と交歓したりして、ようやくトレッキングらしい日となる。

2日。ゴラバニ峠へ。峠付近はラリグランス(シャクナゲ)のみごとな樹林。開花時のはなやかさが思われる。二七〇〇メートルの峠から長い長い下りでブルグンディ・コーラに降りた。途中、樹林の切れ間から初めてマチャブチャレが見えた。ヒール(一二〇〇メートル)の乾田で幕営。

3日。アンナプルナ南面から流れてくるモディ・コーラの出合ピレタンティへ下り、チャンドラコットの峠へ二時間の登り。アンナプルナ南峰とマチャブチャレをみながら、菩提樹の下でお釈迦様のようにうたた寝する人もいて、のどか。ここで藤島玄氏ら新潟支部の方たちと奇遇をよるこびあう。ゴラバニ峠まで行かれる由。

いくつかの小部落をへて、アンナプルナ連峰や遠くにマナスル三山、そしてポカラのペワタールをはるかに見おろしながらノーダラ着。部落下の乾田で山中最後の夜をすごす。ヒマルチュリの上に満月が出る。

4日。平地へ降りる日。刻々と色彩を変えてゆくマチャブチャレを眺めながら朝食。バナナが実るそのむこうに雪のアンナプルナ山群というコントラストをたのしみながらポカラへ。空港前のホテルの庭に幕営。トレッキングの終了

をモモ(ぎょうざ)とビールで祝う。

カトマンズに戻ってからは、市内の本屋めぐり。六、七軒あるという書店をかたっぱしからたずね歩き、書庫にまで入りこんで図書室に収納するめばしい本をさがす。もちろん英文図書が主体だが総じて日本での売価より二、三割安いようだ。ちなみにポニントンのEverest, The Hard Way は日本で四八〇〇円だが、カトマンズでは一三九ルピー、つまりおよそ三四〇〇円。購入図書は整理して発表するが、大量に購入したので割いてくれたのはもちろん、ホテルまで人間ごとクルマで送り届けてくれた書店もあった。

△蛇足▽帰途、パンコックから東京へのアリタリア航空機にトレッキングに趣味をもつイタリア人スチュワーデスがいて、私たちの風態をみて旅のつれづれに一冊の本をかしてくれた。ミシェル・ベッセル(フランス人)の Mustang, a Lost Tibetan Kingdom(英文)。山本良三氏がくどいたところ、数週間後、勤務で東京へ来た彼女から読み終えたので譲ると電話があった、見事入手したとのこと。

(大橋晋、大森久雄)
△参加者▽近藤信行、近藤緑、河村栄二、大森久雄、油谷次康、伊藤博夫、河野悠二、山本良三、鈴木実、北林嘉鶴子、福田光子、北島光子、福島健一、大橋晋。

ス キ - 2 題

蓼科山に雪艇で
初めて登りしこと

田中武弘

諏訪湖に氷が張らなくなり、スキーが出来なくなったせいもある、昭和四年頃からスキーをやろうと思いつき、手づくりでスキーをつくった。形は絵本などに出ていたのを見習った。材は桜がよいというので、桜の木をさがし、板に引割るより丈夫だとのことで二つ割りにした。薄く鋭でけずり形をつくった。先の曲りは、焼いたり煮たりして苦労して曲げ、金具は厚さ二・五ミリぐらい、幅五センチぐらいの板金をスキーの胴へ穴を開けて通して曲げ、靴の爪先が固定出来るようにし、綿皮は長いのを通して靴をしばりつけるようにした。スキーの長さは一・八メートルぐらい。幅は曲りのところで一〇センチ、厚さは一センチぐらい、足ののるところで幅七

売場ご案内

最新入荷の本

- ★雲海11—ボルネオ遠征特集—(法政大学体育会ワンダーフォーゲル部) 3,000円
- ★安全登山テキスト(埼玉県山岳連盟) 700円
- ★近代日本の登山史(安川茂雄) 3,800円
- ★コルディエラ・ワイワッシュ1967年(東京白稜会)1,000円
- ★美しい日本の旅路—尾瀬松枝岐温泉(橘喜一郎) 500円

茗溪堂では一般山岳図書をはじめ、海外遠征登山の記録と報告書及び東京以外で発行されたものなど、巾広く「山の本」を取り揃えるよう努めておりますので、ぜひお立ち寄りください。

茗溪堂

〈山の本の売場〉 お茶の水店三階
営業時間 平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

センチぐらい、厚さ約三センチ。後は幅八センチ、厚さ一センチほどにした。エッジは別に付けず、白木のままで、蠟を裏表とも、こたで焼き込んで防水した。杖は二本で、真竹の径二・五センチぐらい、長さは腋の下までにし、リングはトウで径二〇センチぐらい、十文字に皮で締め、なお四角に作りを掛けた。

昭和五年になると、霧が峰へ学生たちがスキーをやりに来ているなどの話が時折耳に入った。一度その人たちに会ってみたいと思いい車山の沢（現在の緑の村別荘地）に登り、池のくるみへ出かけてみたが、遠くで五、六人の人影を見ただけで帰った。

昭和六年になって、近所に仲間も出来、三、四人で南平から車山周辺をよく歩いた。とにかく根気よくスキーをはき、自分なりにスキー操作にもなれてきて、南平や霧が峰では面白くなってしまいい、蓼科山へ登ろうなどと考えるようになった。その頃諏訪に、霧が峰スキークラブなどが出来たようだったし、蓼科温泉のほうにもクラブをつくらうという動きがあったようだったが、私は、そういう団体にはついに加入しなかった。

昭和七年の小正月（一月十四日）に池之平（現在の白樺湖）の蓼科小屋（現在湖月荘のあるあたりで昭和四年に出来、主は藤巻兼助、昭和

和十三、四年頃小屋をたたんでしまった）へ泊りがけでスキーに出かけた。小屋に着いて主といろいろ話していると、冬山は鉄砲打ちが輪カンジキをはいて、前掛山からトキン付近へ、カモシカ撃ちに出かけるなどという話をしていたが、頂上へ登った話は聞かなかった。そして、明日、上諏訪から藤森彦（当時二十三、四歳、商家の息子で上諏訪霧が峰スキークラブのリーダー格、戦争中に亡くなった）がスキーに来ることになっているとの話が出た。そこで彦といっしょにそこら歩き、本格的スキーでも習おうかと考えた。

十五日の午後、車山越えて彦が友達（梅谷（神戸の会社員、彦の学校仲間、戦争中亡くなった）のこと）と二人でやってきた。アノラク姿の彦とダブルの背広にスキーズボンのいでたちを見て、おおいに敬意を払ったものだ。二人ともヒッコリーの山スキーをはいているし、靴は一枚革仕立ての舶来品だという（上諏訪あたりでスキーが市販され始めたのは昭和六、七年頃だ）。

彼らは、明日蓼科山へ登ろうと思うが、道案内をしてくれ、という。私は地元人間で夏山はよく歩いているのでいっしょに行くことを引きうけた。早朝出発というところで明日の準備を始めた。スキーへ巻くシュロ縄（他の縄は水を吸って雪がついてうまくないので

もっぱら垣根などをしる細めのシュロ縄を使った）や杖のリングや竹の点検、金具の締め直し、締皮の手入れ、まさかの時の輪かんじきの点検、靴の保革油塗り、靴下、手袋等の用意をした。しかし私にはアノラックや防寒具の用意はなく、ジャケツ一枚とハッピ一枚、それに襟巻き一本とタオル一本を背負い袋へ入れ、それでおしまい。

一月十六日朝七時に出発。天気は快晴、気温は零下十五度以下だったろう。弁当に餅のつけ焼き、あべかわなどを五、六枚つくってもらい、紙に幾重にも包んで背負袋へおさめた。腰に鉈を一丁、用

心のためにつけた。三本松へ出、六川道ぞいに箕輪平へむかい、箕輪川にそって番所へ向かう。登りにかかって彦たちはスキーにアザラシをつけ、私はシュロ縄を巻いた。先導する私に皆少々遅れ気味だったが、たいした苦勞もせず番所へ到着。八時頃だった。番所で彦が、どうも新雪は和製シルにかなわないと云い出し、彦と梅谷がシュロ縄に巻きかえる。

番所を八時半頃出発、出来るだけ夏道にそって登った。馬返しには十時近くだった。天狗露地までは雪もやわらかく急なので相当まいった。天狗露地の眺望はすばらしかった。そこから肩（將軍平）

まではいしたこともなく登れた。頂上はかなり風がありそうなので十一時、ここで弁当にする。十二時前に頂上へ向かう。行者小屋の下から階段登高をして樹間をぬけると、何もない坊主山、風の通る敵が出来ていて少々固い。右へ回って大きく折り返し左へ進む。八ガ岳が見え始め、頂上となる。平らの部分は岩の頭が出ていて、頂上には雪がつかぬらしい。一時過ぎになり、頂上には長くはいられなかった。着ているものがガバガバ凍るし、手袋も凍りだした。スキーの縄をはずし、登った跡をたどって下る。さすがに彦や梅谷は下りには強い。さしたる苦

明治初期の日本における

外国人の登山活動について（六）

水野 勉

ウィリアム・ガウランドの登山事績に関しては前二回にわたって述べたが、北アルプス以外の山にも言及しているので、そのことを書いておきたい。

文献は例のG・J第七巻記載のものである。それによると、ガウランドは南アルプスの山麓を歩いている。山そのものには登らなかったが、北アルプスと同じくらしい高さの山々で、未だに探られていないと述べている。また、大山（ダイセン）についても言及し、その付近を歩いている。登山はしなかった。さらに、鳥海山、日光付近の山々、九州の山々、吉野南部の紀伊の山々についてもふ

れていることから考えると、ガウランドは日本各地の山岳地帯に足を踏み入れているようである。上越の山々については言及していないが、日本の山岳の全体的な構造は把握していたのであろう。たしかに文字通り、日本の近代登山の先駆者といえると思う。

それにしても、ガウランドと共に槍ヶ岳、爺ヶ岳、蓮華岳、乗鞍岳などの登山をおこなったエドワード・ディロンという人はどういう人であらうか。やはりお雇い外国人の一人であらうが、ガウランドと同行したことから考えると登山が好きだったのであろう。ぼくは調べていないので、どな

労もせず番所まで下る。私も雪だらけになりながら後を追った。番所へ着いたのが三時頃だった。お茶を一杯ご馳走になり、夢山小屋へ帰ったのが四時すぎだった。

夢山山への冬の登頂は聞いたことがなく、私たちが初めてのスキー登山であった。天気にも恵まれずばらしかつた一日を一杯飲んで喜びあった。

その後、昭和八年頃から山スキーも随分盛んになり、多勢登ったようだ。昭和十二年三月までは私も随分冬に登ったが、番所側からのぼって大河原峠へ下り、天祥寺原を抜けて竜源橋へ下ることが多かった。終戦後、広尾高校、小松川高校等の寮が出来てから冬山の

徒歩登山は随分ふえたようだ。若い人たちにこの初歩的な冬山スキー登山を味わってもらおうと誘いをかけてみたが、私のスキー技術では誰も信用する人がなく、昭和三十九年三月十九日、ひとり登ったのが最後だ。この日もすばらしい天気で、良い気分だったが、おりのに水出へ出、牧場へ下ってやりそこなった。いたるところにバラ線の垣が埋まっているし別荘地造りの道が通っていて、快適な滑降は味わえず終いだつた。その後、御泉水から下へスキー場が出来て、リフトが上り下りしている。

(筆者の田中武弘氏は、長野県茅野市北山松原在住、六三歳通称河童)

スキ - 2 題

大雪山旭岳ゲレンデ

井出 貢夫

旭川でちょっと話をするついでに、ユコマンベツから姿見に上ってひと滑りして来ようと考えた。天気予報は晴天と告げているし、とにかくロープウェイで上って滑り降りてくるだけである。天気さえよければ、いささか年を感じるこの頃の私ひとりでも別に心配はあるまい。話のついでにという所

まって翌朝友人が車で迎えに来てくれた。八時四十五分に宿を出て十勝から大雪山まで、見える限りの山々が美しく輝いているのを楽しみなが九時五十分にはもうロープウェイの駅に着いた。折よく十時発のに乗って見ると、みんな色とりどりのスキー服を着てまことに軽装である。弁当に魔法瓶に万一の場合を思っあざらしにジャケットその他を入れた、小さいと

たか日本でどういことをしていた人か御存知の方があったら、教えていただきたいと思う。いままでの登山史に名前が出て来ないないので、調べて置く必要があると思う。もっとも、かれの名はウェストンの『極東の遊歩場』の中で「この地域の山旅をガウランドと同行した人」として記載されている。

最後に「ハンドブック・フォア・ジャパン」からみた外国人の登山活動に関する感想を述べて、この六回にわたる小文を閉じようと思う。

第一版(一八八一年)、第二版(一八八四年)、第三版(一八九一年)と比べてみると、まず気づくのは、前者二版と最後の版は全く内容がちがうというところである。正確に言えば表題が変つておりさらに編者がちがっている。このことは有名だからここでもいう必要はないであろう。ぼくがちがうというのは、筆者がちがうということであり、初版、二版の筆者である、ガウランド、ライン、アトキンソン、ミルンなどの主力メンバーが、第三版を発行するときには、すでに日本を去っている。日本を去っても、前の文章をそのまま利用すればよいと思われるのに、ガイドブックとしての建前として、新しい情報をのみ提供し、古い不確かなものは切り捨てていったのであろう。

その結果、山岳に関する限り、特に中部山岳地帯に関する情報の、重要な部分が除かれたのである。針ノ木峠に関する部分もほとんど除かれた。爺が岳、連華岳もその名を消した。わずかに槍が岳が残ったのが、せめてもの救いといえるだろう。削られたのは北アルプスばかりではない。初版のルート46で日光から金精峠を越え、尾瀬へ出て、そこから北上して八十里越えをするガイドが載っているが、これは先に述べたクニッピンゲ程の重要さはないにしても、南会津の山々に対する山旅として先駆的であるのに、三版では削られて

しまっている。一つ一つ比べてみれば、そういうことがたくさんあるだろうと思う。そして、しかも、それらは第九版になっても復活されないのがある。山岳に関して第四版以後で追加されたのはすべてウェストンによるものである。

よく考えてみると、これはふしぎなことである。ガイドブックというものは、つねに新しい情報が増加されていく、その地方のことが次第に明らかになっていくのに、この場合は、都会地ではなく、山岳地帯ということではあるが、次第に不分明となっていくのである。もつとはっきりいえば明治初期、明治十年前後の外国人の登山活動がいかに烈しいものであり、それ以後、ウェストンが来日するまでは、つまり、十年から十五年間のブランクがあるということを示している。たとえ登山が行われたにしても、富士山、浅間山、立山、御岳、白山、日光という有名な、江戸時代から登られている、近代登山と全く無関係なものであつたらうと思う。未知を切り拓いていくという性格の山旅あるいは登山は、一時影をひそめたということであろう。明治初期にあれ程の多くの人びとの情熱を集中させたエネルギーはどこへいったのであろうか。やはり、お雇い外国人の帰国とともに、そのようなエネルギーは減少してしまったのであろうか。

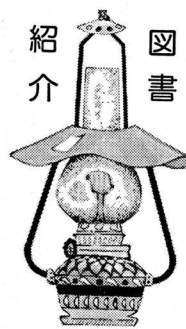
そういふ点からみると、第三版は山岳関係の点で、見劣りのする版といわねばならない。日本旅行案内としてすぐれているとしてもである。ガウランド、ライン、アトキンソンなどの、あるいは無名の人びとの、あるいは、編者のアーネスト・サトリーの強い情熱が感じられないのである。

(完)

はいえリュックを背負った者など一人もいない。古めかしい、それでもカンダハの私のスキーを見て前にいる若いのが、博物館にあるスキーみたいだとつれの男に話している。姿見に着いて、小高いところ、たぶん一六二〇メートルの台地までスキーをかつぎ上げてみると、二、三台のベンチが置いてあって、そこにそれぞれにおお向けに寝そべって日向ぼっこをしている。そばには七、八歳の男の子と一緒に、派手なスキー服の若いお母さんも腰を下ろしている。風がまったくなく、太陽がさんさんと照っているので旭岳の頂上から湯煙を上げる姿見のこの真白な台地も、まるでホテルの露台で日向ぼっこをしているような気安さである。真冬だと諸所凍っているこのあたりも今日は手頃なしまり雪である。十時半、若い人達が二、三人滑って行くあとから、天人ガ原へのやや急な斜面を私のペースで滑りやすそうなところを選びながら転んではがをしないようにゆっくり下って行った。

トドマツ、エゾマツの森林を染しみながら行くと、重いリュックを背負った四、五人の山男達が登ってくるのに出会った。今日ほどこまで行くのかと聞くと石室どまりですと答えた。森林の間を五メートル幅位にローラーをかけてあるので、このあたり、もう重たく新雪の中を滑るよりはその方がら

くで、そのシユプールぞいに、所々であたりの風景を楽しみながら、風の音もないまったく穏やかな陽光の中をゆくりとロープウェイの駅までふたたび下り着いたのは十一時二十分だった。十時にロープウェイに乗って、十時半に滑り出して、途中諸所で息を入れながら十一時二十分には、もう下り着いている。若い人達は多分二十分とかからず滑り下りて、またロープウェイに乗るのだろう。



図書
紹介

東 海 山 岳
第 四 号
東 海 支 部

いわゆる正統派の本山とも目されてきたJACの体質とはおよそ似つかわしくなく、激しく動いてきた機能集団、部外者の目には時に「遠征単能組織」として映ったこともある、そんなJAC東海支部からボリュームのある一本がまた出版された。

これはまったくゲレンデである。しかし森林の美しさはそれでもなお昔の面影を残している。温泉で汗を流して、待っていてくれた友人の車で午後二時旭川発の列車に充分間にあった。今日は四月一日、まことに嘘みたいな話である。車中今昔の感に耐えない思いであったが、こんなに楽しいなら、四月中にまた来ようと考えている。山も人も(自分も含めて)変わったものである。

一九六一年から十五年におよぶ東海支部の歴史は、冬の困難な岩壁登攀によって幕を明けたこの国のアルピニズムの激動の日々と重なっている。「東海支部この十五年」は、ルム・ノートを中心としてつづったいわば「東海支部外史」ともいえるべきものであろうが、それだけに人間臭にあふれて読む者の胸をつかむ。

RCCⅡ結成の頃の中京世界のレベルが卓越していたことは良く知られているが、この豊かな土壌が東海支部という異能な組織を生みだしたいきさつがまず語られている。

結成三年後に発行された「東海山岳一号」には「この会報はこれを作ろうとする力によって作られた。今後の東海支部の育成も、東海支部が行なう企画も、すべてはそれをやろうとする人間によってかなされ得ないであろうことだ

* テイルマン著・深田久彌訳
ネパール・ヒマラヤ

* 寺尾宗冬著

味 国 記 朝日新聞に好評
連載中・重版ノ

* 山学同志会著

谷川岳の岩場

* 尾崎喜八草稿詩集

花咲ける孤独

* デュアメル+尾崎喜八

わが庭の寓話

* 安川茂雄著

増補 近代日本登山史

A5判函入り
三八〇〇円

A5判変形美装
一四〇〇円

A5判函入り
三八〇〇円

B5判変形普及版
二四〇〇円

A5判変形函入り
美装 一八〇〇円

菊判函入り五八〇
頁三八〇〇円
限定部一〇〇〇

〇円

行きたいとは思わなかったということだ。

「マカールの嵐」が去ったあとルムには奇妙な静寂と空虚が訪れ、その中で幾人かの人間は激しく苦悩する。「Ⅱ時が立つ、人間たちが老廃するⅡ」多くの人間の戦列からの離脱をうかがわせる言葉がルムノートに散見される。マカールのあと、支部は、一九七五年カラコルムのラトック山群遠征を実施した。「ラトック山群一九七五」は登山隊および学術隊の行動記録とその反省である。ラトックは絶対的なルートの危険度もさることながら事前準備の不足が反省されている。カラコルムの高地が意外に降雪量の多いのに驚

けが明らかなことである」と話されている。「個人を生かす組織」として成長しようとする確信に満ちた気概がある。

——マカールの企画——ネパールの登山禁止——アコンカグア南壁への転進——再び構築されたマカール計画。この間に見られた躍動と沈滞のくり返し、あくなき執念。特にマカール計画の詰めでは、事を成そうとする人間のすさまじいまでの気はくはく倒される。マカールがやりたいということは、マカールをやるまでは挫折しないということと同義でなければなんの意味もない。「マカールができたかった」ということは、マカールへ

四季書館

〒106 東京都港区六本木 6-4-5 竹皮屋ビル (03) (478) 4790 振替東京 (5) 44385 書店に品切れの場合は小社に直接お申し込みください。

き、長大な氷河の存在を納得したり、機動性に富んだ探査行が成されるなど、ここには遠征の楽しさが随所に見られ、明らかにマカルー後の志向性を感じ受けるのは興味深い。

『論文』として、ジーン・リボリアの「高所順化」の訳、およびハーゲン・の「ネパール」からの抄訳が納められて、資料的価値を高めている。楽しいパミールやカシミールの紀行もある。

この第四号は、過去に支部が発行した一連の会報・報告書類を踏まえて位置づけられているのだから、その内容を良く知らない者には編者の意図が充分に伝わりにくい部分もあり、この点、支部出版物とは言え一工夫ほしい。

マカルーとそれ以後の軌跡を明確に連鎖する論理は奈辺にあるのだろうか。たどってきた歴史の至る所に見られた強烈な個性の主張は今後いづこを指向し、また、支部員はこの支部の将来をどう考えているのか。

東海支部という存在が登山界にもたらした影響の大きさを考えれば、十五年の歳月に何らかのもっと充分な総括とも言えるものが欲しかったように思われる。

昭和五十二年二月刊、A5判四三〇ページ、頒価二五〇〇円、送料二〇〇円。申込みは「山」二月号(三八〇号)参照。

(稲田定重)

1975 TUATAC DHAULAGIRI-II

ダウラギリII峰
登山隊の記録・
1955

東京農工大学
ヒマラヤ登山隊

一九七五年プレモンズスーン期にダウラギリII峰へでかけた、東京農工大学ヒマラヤ登山隊の公式報告書である。

同山岳会は、昭和四十二年に、ペルー・アンデスのヒリシヤンカに遠征した経験はあるものの、山岳会としての基盤はそれ程古いものではなく、計画実現までの苦勞がうかがわれる。その意味で、他の大学山岳部の遠征隊にとっては参考になる点が多いと思われる。

同隊は、当初ダウラギリV峰を希望したが、ネパール政府の許可の関係で、ダウラギリII峰を目指すことになり、人跡未踏の東南面、ツァラボン氷河から東稜ルートをとって頂上を目指すことになった。

三月下旬に飯のBCに入ってから、ただちに登山行動に入り、下部岩壁帯を突破して、四七〇〇メートルの地点にBCを設営、その後順次上部キャンプを三カ所設営し、五月十六日、六七〇〇メートルのCⅢから二名の隊員が頂上を目指した。

残念ながら悪天候と隊員の極度

の疲労のために頂上から約四〇〇メートルを残す地点で引返し、登頂を断念したが、このルートは決して不可能なルートでなく、七二〇〇メートル前後の地点にもう一つのキャンプを出せば比較的内容易に頂上を落せるのではないかと推察される……と結論している。

失敗の原因としては、高度順化がまずかったこと、したがって隊員のコンディションを適確に把握できず隊員の持つ能力を十分に発揮しないうちに消耗してしまつたと反省している。

本報告書は、「I」紀行、「II」計画と行動、「III」資料に分けてまとめられ付表として巻末に行動表、ルート図を収録しており、よかつた点、反省すべき点が卒直に述べられているので参考になることが多い。

この成果を踏み台として、このルートからの再攀を期待して止まらない次第である。

昭和五十一年十二月、東京農工大学ヒマラヤ登山隊発行。A5版五十三頁、写真十六葉、非売品。

なお、二〇〇部限定の残部が若干部あるので希望者は左記へ申込みば実費(送料共一〇〇〇円)で入手できる。

横浜市磯子区滝頭一ノ二ノ一七、横浜市衛生研究所、小林伸好宛。

(松田雄一)

改訂増補 本草関係 図書目録

国立国会図書館支部
上野図書館所蔵

上野図書館所蔵の標題の目録が上、下巻に分けて刊行されたのは昭和二十七年、二十八年のことであつた。これはごく少数部数だったようである、その後入手出来なくなつてた。

小生はこれを吉田久兵衛氏の御好意により、何とか上下二冊を手もとにそろえたが、なぜこの目録が重要かといへば、江戸時代の本草学者による各種の採草、採薬紀行の目録がずらりと並んでおり、登山史の研究には欠かせない重要なものだからである。本名譽会員故白井光太郎博士の旧蔵書も全部網羅されており、また幕末から明治の本草学者伊藤圭介翁の文庫もここに収められている。まさに本邦有数の本草関係の蒐書目録で、今回復刻に当り、改訂増補され装を新たに発行された。

昭和五十一年十月、つかさ書房発行、二七二ページ、定価三七〇〇円(ルームでは三三〇〇円に割引きして発売している)。

(山崎安治)

●お知らせと報告

スイス・アルプス名画展
スイス・アルプスが絵画を通じてどのように表現されてきたか、四十九人の画家による七十五点の作品によって歴史的に展開される絵画展がひらかれます。このような主旨によってアルプスの名画を集めて構成した展覧会は、スイスの内外ともに初めての企てです。

会期 三月二十五日(金)～四月十九日(火) 木曜休み

会場 東京新宿・小田急デパート11階グランド・ギャラリー
主催 スイス・プロヘルベチア文化財団、朝日新聞社

1977 ALASKA, CANADA, U.S.A.

ヨセミテ・バックパッキングとMade in U.S.A.

4月28日(木)～5月6日(金) 9日間¥320,000(全食付)
8月7日(日)～8月15日(月)

カナディアン・ロッキーズ氷河の峰登頂

8月5日(金)～8月13日(土) 9日間¥370,000(全食付)

他にアラスカ氷河の峰、マウント・レニア登頂、冒険旅行など

企画 株式会社ツアーズ 〒112 東京都文京区後楽1-1-17
担当/黒川 恵(日本山岳会、カナダ山岳会会員) 主 催 株式会社日本一般旅行

後援 外務省、文化庁、在日イス大使館、朝日イブニングニュース社

内容 18世紀後半、カスパー・ウォルフ、ハインリッヒ・ヴェストから19、20世紀、セガンチーニ、ホドラーなど。
入場料 一般五〇〇円 学生三〇〇円

蔵書の金脈を

掘りあてて盛会

——第九回山岳図書交換会——

第九回の図書交換会は昭和五十一年十月二十三日(土)午後二時から本会ルームで開かれた。この会も回を重ねるにつれて盛況になり、担当の図書委員会も喜んで、交換会とはいいながら若手会員の出品が少なく、年配・先輩会員の出品を若手が買い求めるといって一方通行になってしまい、このままでは「種切れ」になってしまうのではないかとこの心配があった。しかし今回は、串田孫一氏から四〇〇点に及ぶ出品の申し出をいただき、まさに「蔵書の金脈を掘りあてた」感があり、ルームへ運搬の労をとられた山本図書担当理事の自動車、本の重量に耐えかねて傾いてしまったというエピソードまでついた。また近藤等氏からはフランスの原著を多数ご出品いただき、諏訪多栄蔵氏は、大阪

御在所岳北谷の水質調査(二)

東海支部 尾上 昇

三、調査の結果と考察

現地にて水色、臭気、水温を調べ、現地の見取図および写真をとった。

試料は採水後クーラーに入れ下山後ただちに分析を行なった。

分析の結果を表に示す。表の上を用語の簡単な解説を付しておいた。

次々と難解な専門用語が飛び出してくるので、この解説と下表を見ながら読んで頂くと良くお判りになって頂けると思う。

我々はこの山域の水質の非汚染値として No. 7 地点の分析値を参考にした。

浄化槽の排水口 No. 1 地点では強い塩素臭がたちこめ薄乳白色の汚水が排出されていた。

水温も 20.8℃ で全調査点で最も高く、分析結果では、SS 60.0, COD 41.3 ppm と有機物量も高く、Cl-140.0, Zn 0.13, Fe 1.60 と生活汚水の各指標が高値を示していた。

また塩素消毒による残留塩素が 14.0 ppm 検出され、その酸

化還元電位も強酸化状態を示し測定不能であった。

Do(溶存酸素)は過飽和であった。

No. 2 地点では外観は薄乳白色であり、弱塩素臭を感じ、SS は 18.8, COD 14.6, Cl-34.5, Zn 0.047, Fe 0.61 ppm と山上公園内の池の放出水により希釈されているが No. 1 地点の性状を保っている。

No. 3 地点の枝沢は西山頂より流下するもので、無色、無臭の外観を示し、水温も 16.3℃ と低かった。

また各分析値も Fe 0.16 ppm が多少高いのを除けば、No. 7 のバックグラウンド値と同様な良い状態であった。

No. 4 の北冷水の水場では、検水から弱塩素臭が感じられ、外観は薄にこりであった。表から No. 4 と No. 7 の数値を抽出して比較してみよう。

有機汚濁の指標となる SS と COD を見ると No. 4 は SS で No. 7 の三〇倍の 12.0 ppm, COD は No. 7 地点は不検出であるのに 6.0 ppm 検出された。

Cl- は六倍の 15.2 ppm, Zn は二倍の 0.032 ppm, ORP は残留塩素が 0.4 ppm 検出されたので酸化側にスケールオーバーした。

また No. 7 地点では不検出の Fe が 0.52 ppm 検出された。これら No. 4 地点の汚濁の原因は明らかに No. 1 の浄化槽の排水で、その成分分布は No. 3 地点の枝沢により希釈されているが、No. 1 地点および No. 2 地点のパターンと同様である。

No. 5 地点は藤内壁より流れ下る藤内沢であり pH が 4.6 で酸性である点を除けばは良好な値であった。

pH の酸性要因は今後の調査を必要とするが、岩質に起因す

るものと思われる。

No. 6 地点の北谷本流では No. 4 地点との間に二本の枝沢が流入し、また流下距離が約一キロ近くあることなどで希釈、分解、吸着等により COD 1.0, Cl- 5.2 ppm と良好な値に近くなっている。

しかし Cl-イオンが示すように、No. 1 地点の排水の影響がわずかながら感じられる。No. 7 地点の水場として利用されている沢水の分析値は全調査点の中で最も良い水質を示している。

また水温 12.0℃ と低温であり、地下水が地表に出てからの流下距離が非常に短いことも判る。

No. 8 地点の水質は No. 7

COD (化学的酸素要求量): 有機物などの化学的に酸化できる物質の量を示す。

残留塩素: 塩素消毒時の残留する塩素の濃度量。

ppm: 百万分の一の値、表の基準は mg/l。

Zn ppm (亜鉛)	Cu ppm (銅)	Fe ppm (鉄)	Cd ppm (カドミウム)	Pb ppm (鉛)
0.13	0.025	1.60	trace	<0.1
0.047	0.010	0.61	<0.002	"
0.02	<0.005	0.16	"	"
0.032	"	0.52	"	"
0.027	"	0.15	"	"
0.017	"	<0.05	"	"
0.016	"	"	"	"
0.015	"	"	"	"

から郵送・出品していただいた。このほか二十三名の会員から出品いただき、和私書(部・会報を含む)六七〇点、洋書二五五点、雑誌二〇三点、総計八九六六の多きに達し、近年にない豊かな交換会になった。

この会にだけ欠かさず出席という会員も見られ、今回も正午すぎから開場を待ちきれない熱心な会員諸氏が続々と訪れ、二時近くには、ルームは本と人で身動きもできない状態になった。

出品点数は多くても人気の本はやはり激戦となり、ギド・レイ「アルピニズム・アクロバチコ」に十四人、深田久弥「わが愛する山々」ジャン・フランコ、リオネル・テレイ「ジャヌーへのたたかい」が各十二人、茨木猪之吉「山旅の素描」ジャン・フランコ「マカルー」に各十一人、深田久弥「山があるから」「山岳遍歴」に各十人、深田久弥「雲の上の道」本多勝一「知られざるヒマラヤ」に各九人など抽選のたびに歓声が上がりルームは熱気と興奮のつぼと化した感があった。

今回は稀観本も多く、板倉勝宣「山と雪の日記」、藤本九三「垂直の散歩」はいずれも最低価格五〇〇〇円で入札制にしたが、前者は八〇〇〇円で和久井正明氏、後者は八五〇〇円で神原忠夫氏が落札された。このほか京都帝国大学白頭山遠征隊「白頭山」が五〇〇

・自然保護情報・

地点の枝沢の流入もあり、No. の地点よりもさらに良い状態になっている。

この採水点は、兎の耳泊り場と呼ばれているキャンプ地であり、事情を知らない人々には飲用されていることからその分析結果が心配されたが、今回の調査では分析しなかった大腸菌などの一般細菌を除いては良好な状態であった。

しかし過去に腹痛を起したり下痢をした者もあり、また洗剤等の泡なども認められたこともあるので、できるだけ利用しない方がよいと思われる。

四、おわりに

導通り北谷の上流部一帯にかけて水質の汚濁が認められた。その原因は山上公園の諸施設の生活汚水処理する浄化槽の排水であることが分析結果によって明白となった。

バックグラウンド値と定めた人工的な施設の設けられていない地点(No. 地点)との数値の比較を試みれば、その汚濁のひどさは一目瞭然であろう。

汗を流して登り、地図にも明記されている水場にかけてより、このように汚染されている水で喉を潤す登山者達の姿を見る時改めて事の重大さを痛感する。私の知人の医者に北冷水(No. 地点)のデータを提示したところ、この水を飲めば身体に何等かの影響を与えることは確かであるという見解を得た。

我々は企業に自然を守る良心的な配慮を求めるとともに、国に対しては、行政基準の不備を指摘し早急に山岳高所における特別な水質基準の制定を望むものである。

今回の調査は全て専門家の方々の指導を得た。

私自身何の予備知識もなく、この問題に飛び込んだことから、レポートをまとめるのにも大変苦労した。

レポートをまとめながら、この問題はただ一地方の特殊なケースに止まらず、各地で次々と観光地化されていく山や谷、それにスキー場や山小屋等、現実に同様な問題が起きていながら何の処置も講じられず放置されているのではないかと疑問に気付き、慄然とならざるを得なかった。

大自然という聖地を最初に侵す者、それはいつも我々登山者である。この責任において我々が最低為さねばならぬ義務、それは自然の保護に外ならない。

今回の調査が自然保護運動啓蒙の一助となれば幸いであり、そこにまたこの調査の狙いもあるのである。(完)

表 2 調査及び分析結果

注)

PH: 酸性かアルカリ性を示す。中性=PH 7。

ORP (酸化還元電位): 酸化状態か還元状態かを調べる。

DO (溶存酸素): 水中に溶けている酸素量で水温によって溶ける一定基準。17℃の場合 9.37 ppm。

SS (浮遊物質): 下水中の有機物質や粘土鋼物の量を知ることができる。

調査項目	水 色	臭 気	水 温 ℃	PH	ORPmV	Do ppm	SS ppm	COD ppm	Cl ⁻ ppm (塩素イオン)	ppm 残留塩素
地点 No.										
1 (排水口)	薄にごり	塩 素 臭	20.8	7.1	+over	12.5	60.0	41.3	140.0	14.0
2 (北谷源流)	薄にごり	弱塩素臭	17.7	7.4	+over	9.4	18.8	14.6	34.5	2.0
3 (枝 沢)	無 色	無 臭	16.3	6.8	+460	8.4	0.8	0.6	1.6	<0.05
4 (北冷水)	薄にごり	弱塩素臭	17.1	6.6	+over	8.5	12.0	6.0	15.2	0.4
5 (藤内沢)	無 色	無 臭	19.1	4.6	+530	8.1	1.2	1.9	1.8	<0.05
6 (北 谷)	無 色	無 臭	18.5	6.6	+420	7.9	1.2	1.0	5.2	"
7 (枝 沢)	無 色	無 臭	12.0	6.7	+420	9.2	0.4	N.D	2.5	"
8 (北谷中流) (兎耳泊場)	無 色	無 臭	17.0	6.3	+430	8.7	0.2	N.D	2.7	"

○円で、小島島水「山の風流使者」が三〇〇〇円で、志村島嶺・前田曙山「やま」が四〇〇〇円で希望者の手に渡った。

売上げ総額は五四万四七〇〇円だったが、本会および図書館にそれぞれ一割を寄付していただいた。出品各位に厚く御礼申しあげます。

なお、出品多数のため、会の運営にやささか不手際があったことをおわびします。(伊藤博夫)

△出品者▽浅原重継、伊藤文蔵、入沢郁夫、折井健一、織内信彦、鹿島節子、雁部貞夫、菅野弘章、神原忠夫、串田孫一、後藤博、近藤等、島田巽、諏訪多栄蔵、高橋照、田村俊介、千葉保之、橋爪幸達、林清、村井米子、安田正介、山崎安治、山本良三、吉沢一郎、和久井正明、渡辺公平。

第15回 木暮理太郎翁碑前懇親会へのお誘い

日時 5月14日(土)午後4時より
碑前祭、同6時より懇親会。

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山

費用 宿泊(有井館)費を含め、一人四五〇〇円ぐらい。

申込み 5月1日までに本会ルーム事務室へ。

ルーム日誌

(52年1月)

10日(月) 集会委員会

一枚の写真



去る八月末ごろ、たまたま奥原教永君に電話をした折、島々の上条孫人君が七月の半ば病状あらたまり、遂に遠逝したことをきいた。生きていたうち一度会いたかったが、もうあとの祭りで見舞にも行かなかったことが悔やまれた。

そう言えば十八、九年前に、孫人が僕にわたしてくれと言った、当時何くれとなく孫人のことを心配していた近藤(恒雄)さんに託した写真が、どこかにあった筈だと思い、机の引出しを探していたら、出て来たのがこの一枚(右)である。言わずと知れた上高地の河童橋の下の河原でうつしたものだ。

時はたぶん昭和十四、五年頃岳沢の雪の工合から八月中、下旬だと思う。左が小谷部全助、既に胸をわずらって上高地や涸沢へ保養に行っていたころだが、まだ病氣もたいして進行しておらず、半ば療養、半ば登山という、いかにも彼らしい暮し方をしていた時分だ。右が上条孫人で年令は三十歳ぐらいかと

思う(昭和十三年度版『山日記』を見ると上条孫人(29)と記されている)。中央は、孫人の説明によると、島々の斎藤元正(元峯)という自称上高地部長、この顔に見覚えのある方は、何人かおられるだろう。

撮影者は、細野の山案内人塩島鑑司の息子で、当時西糸屋にいた山岳写真家の玉子の由。小谷部が胸の病で富士山の療養所で亡くなったのは、終戦の年の十二月だから、もう三十年以上の歳月が流れた。この写真は二十五、六歳のころのもだが、孫人も鬼籍に入り、在りし日の元氣なころの二人の姿を伝える珍しい一枚となった。(望月達夫)

K2——そして

私の知っている人

吉沢一郎

一九三八年のK2攻撃記(AJ)を訳し、ハウストンの許可を得てから「山岳」に出して以来、彼との手紙の上でのつき

合いが始まった訳だが、一九六一年ペルーとボリビアでの山登りが終ってまたリマに戻って休養していた時、AACの本部でプカヒルカに関するレクチャーをやることになっていてという連絡が森脇君から来た。リマからならロス経由でもNY経由でも飛行機賃が同じだというので帰えりにNYに廻ることになっていたのである。

その小集会にはチャーリーの父親のオスカー老も来ていてくれた。近く家族全員で日本へ行くからよろしくとのことであった。

帝国ホテルの大きな一室で私は初めてチャーリーに会った。「吉沢さん、二十年振りに到々会えましたね」というのが彼の口から出た最初の言葉であった。話はK2とナンダ・デヴィそして日本隊の登ったナンダ・コットのことであった。それから暫らくして長居も迷惑と思い最後に「ザッツ・オール」と言ったら皆が一斉に笑い出した。

ここに飾ってある写真は交野君の世話でJACの有志が三井本館で歓談した時のものである。この件については「会報」二一九号を見て頂きたい。

それから一九六八年にワシントン山の北麓にあるアド・カーターの別荘に招かれた時、アンソルド夫妻とその娘のナンダ・

展示資料

一、K2——非情の山(ハウストンから贈られたもの、二十年の友へ」と書かれている。

二、ハウストン親子と山岳会の人々。

三、フリッツ・H・ウィースナー(信濃毎日新聞社にて、この件は「会報」三〇六号一九七〇年十二月、参照)

四、第三の極、ウィースナーのサインと彼のK2における最高到達点(八三八〇メートル)を示す。

五、イタリア隊の登頂記のある「ライフ」誌、一九五四年十月十一日号。

11日(火) ルーム委員会
13日(木) 理事会
17日(月) 集委員会
19日(水) 三水会、学生部
20日(木) 自然保護委員会
24日(月) 集委員会
25日(火) 図書委員会
28日(金) 婦人懇談会
31日(月) 集委員会
今月の来室者二一八名

会員異動

物故者
三五四二 木村武男(51・
12・30)
五八六 又木周夫(52・
1・11)

九四九 馬場忠三郎(52・1・
15)
五一四一 藤田弥一郎
休会復活
六〇〇五 阿岸明子(52・1・
22)
名義変更
五三九〇 伏見紀子(旧姓須田)

会務報告

2月理事会

(2月4日午後六時半 本会ル
ーム)
▽出席者 今西会長、織内、望月
各副会長、浜野、高遠、山本健、
近藤、山本良、神崎、大森、原、
大倉、黒石、田村俊、橋本、浜
口各理事、太田監事、小原浜、
野、折井、宮下各評議員 委任
小倉、皆川、浅田各理事

▽議案

・「山岳」発行について(近藤)
諸事情により刊行が遅れている
が、3月末刊行予定
了承

・フィルム貸出規定案について
(浜野)
承認

・新ルーム購入について(望月)
資金不足分は銀行より借入
承認

・会員よりの募金と同時に会員外
よりの募金も実施する予定
・カラコルム学術遠征隊一九七八

年推薦状交付について (原)
承認

・来年度予算方針について
(山本健)

収入増の見込みなく、運営管理
費の値上りがあるので、事業費
は前年並とする。3月理事会に
予算案提出
了承

・総会日時について (浜野)
4月22日(金)午後6時より
了承

▽報告事項

・遭難対策 (橋本)
ナダレ現地研究会中止

・高成登山 (原)
2月26日「ヒマラヤを語る会」
集会 (神崎)

3月5・6日スキーバス
3月26日オリエンテーション
・図書 (山本良)
2月28日・3月5日丸善画廊
山岳絵画展

3月15日山岳図書を語るタベ
3月17日山岳史懇談会
* * *

昭和五十二年三月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一
利根川商事(株)さくらビル

発行所 日本山岳会
法人 社団

発行者 今 西 錦 司
編集代表 大 森 久 雄
(813)二二六(代表)

振替口座東京三一四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技 報 堂

登山・スキー用具専門店

●買いやすい
山の店

山の店

●北へ来たら
山の店大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●フレッシュな
山の店

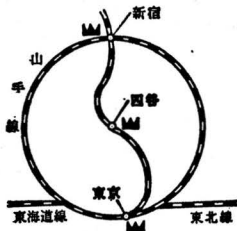
山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目36-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはこ



かたるぐンティ
てんや 281-8456
中央区・八重洲4の1

香山荘

登山とスキー一具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3-4-6 (581)0966 スキー店
大阪店・北区曾根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



山の新聞

特製本在庫ご案内(お求めは直接お茶の水店へ)
中坂本直行画文集▲雪原の足あと▼二五、〇〇〇円
原画花の絵(淡彩2号)付
中望月達夫▲遠い山近い山▼一九、〇〇〇円
中藤島敏男▲山に忘れたパイプ▼一九、〇〇〇円

山日記

一九七七年版

日本山岳会編 A6ポケット判
定価九五〇円プレゼントカード付
登山のために▲山日記をつけよう
山の装備▲山の気象▲山の医療
登山便覧▲山小屋一覽▲新稿/日
本三百名山(案)/地形図一覽/他



わたしの草と木の絵本

坂本直行
B変型判一四〇頁定価一、二〇〇円
十勝の素朴な子供の詩心をそととくみとった詩情豊かな美しいスケッチからは、土のおいが漂ってくるようです。絵に添えられた説明文にも、こよなく自然を愛する直行さんの心情がにじみでている。草と木の楽しい絵本。内容 山の草・野の草18点、山の木・野の木12点、高山の草20点、高山の木8点



グリンデルヴァルトの山案内人

サミュエル・ブラーヴァン
井手貴夫訳 A変型判
アイトー一〇頁定価三、八〇〇円
横有恒氏のアイガー・ミッテルレギー山稜初登攀に参加した著者ブラーヴァンが、日本の近代登山の歴史、組織の成り立ちなどを語る。山岳史上に残る登攀ルート図、山案内人達の肖像、豊富な挿絵、また表紙、製本など原書の体裁をそのまま再現した。

■出版目録送呈
■お買上げ、ご注文は最寄り書店でどうぞ

茗溪堂

〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1 電話03-291-9442 振替東京 8-24723